

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01574

研究課題名（和文）クープマンズの数理経済学に関する文脈的分析

研究課題名（英文）Contextual analysis of Koopmans' mathematical economics

研究代表者

高見 典和（Takami, Norikazu）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：60708494

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、経済学が現在のように高度に数理化される直接の出発点となった20世紀半ばに焦点を当て、どのような歴史的プロセスによってこの数理化が展開していったかを後づけることを目的としている。複合的な要因があったことが分かり、大恐慌や第二次世界大戦によって、民間財団が経済学に関心を強めた一方で、ヨーロッパに分散していた学者がアメリカに移住し、研究交流が活発になったことが大きな要因であったことが指摘できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の経済学史研究では、20世紀半ば以降の展開が十分に議論されてこなかったため、なぜ、そしてどのように経済学が現在の姿に至ったのかについて適切に理解されてこなかった。本研究は、この隔たりを埋め、20世紀前半までの経済学とそれ以降をより連続的に捉える上で意義があると言える。また、現代の経済学を過去からの連続的な発展のもとで捉えることによって、経済学という学問の意義や限界について考える上で新たな視点を投げかけることになる。

研究成果の概要（英文）：This research focused on the mid-20th century period in which economics started its modern mathematizing process and aimed to trace how this mathematization developed over time. It was found that the multiple factors were in effect. For instance, the Great Depression and the Second World War led private foundations to be interested in economics and brought scholars who were scattered around Europe together in the United States, which resulted in their close research cooperation.

研究分野：経済学史

キーワード：経済学史 数理経済学 アメリカ史

1. 研究開始当初の背景

欧米の経済学史研究者の間で 20 世紀半ばの経済学に関心が高まる中、クーブマンズに関しては個別の研究が限られていた。ポール・サムエルソンやジェイコブ・マーシャックのような同時期に活躍した他の数理経済学者には固有な研究がある (Backhouse 2017 や Cherrier 2010) ことと比較すれば、顕著な欠落である。また、20 世紀半ばの経済学として、計量経済学やゲーム理論の発展にも一定の関心が向けられ、1940 年代のコウルズ委員会の貢献についても研究がなされている。しかし、1950~60 年代の数理経済学の展開については手薄であり、この時期に主に活躍したクーブマンズに焦点を当てることで、既存研究の欠落を埋めることができると考えた。

2. 研究の目的

近年欧米で成果を上げている歴史文脈的研究を用いて、1950~60 年代の数理経済学の知的環境を再構成することを目的とする。どのような科学観にもとづいて、そしてどのような他学問の影響を受けて、この時代の数理経済学が研究されていたのかを明らかにしたい。経済学には、19 世紀以降 2 つの主要な伝統があり、一つは演繹的・抽象的の学問として経済学を発展させようとするもの、もう一つは帰納的・実証的の学問として経済学を変革しようとするものがあつた。本研究では、従来見過ごされることの多かった後者の伝統に焦点を当て、経済学のイメージを変えることを意図する。

3. 研究の方法

具体的な研究手法としては、当時の経済学者の刊行著作や当時の新聞や雑誌などを読解することが挙げられる。クーブマンズ自身の著作 *Three Essays on the State of Economics* には、彼の方法論的議論が含まれており、重要な一次資料となる。クーブマンズ以外にも、同時代に数理経済学を発展させた経済学者の一次資料を読解することが有意義である。これらの著作の中にある、学問の進むべき方向性に関する議論を拾い上げ、新しい分析手法を手にした経済学者たちが何を目指したかについて考察する。

4. 研究成果

(1)クーブマンズを始めとする 20 世紀半ばの数理経済学の発展に多大な貢献をなした経済学者について幅広くサーベイを行い、共著を執筆した。野原慎司氏と沖公祐氏と共同執筆した『経済学史 経済理論誕生の経緯をたどる』(日本評論社、2019 年 7 月)であり、全 18 章中 8 章を担当した。これらの 8 章ではそれぞれ、1930 年代の需要理論、20 世紀半ばの計量経済学、ゲーム理論、一般競争均衡理論、行動経済学、有効需要理論、成長理論を扱った。欧米の既存研究を広く読解し、一貫した観点からの歴史叙述を展開した。上述の通り、近年の欧米の経済学史研究は歴史的な文脈に焦点を当て、財団などからの支援を受けた組織的研究に注目する傾向がある。本書の担当章の全体を通して、そのような組織的研究の重要性を強調し、その後の経済学の変遷に大きな影響を与えてきたと論じた。以下の(2)でも取り上げたコウルズ委員会とランド研究所以外にも、エコノメトリック・ソサエティやアメリカ政府の経済諮問委員会などが経済学者の根本的関心に一定の方向づけをなしたことを論じた。

(2)学術誌『経済学史研究』からの依頼により、(1)の著作と同様の内容をより簡潔にまとめ、英文の展望論文を執筆した。すなわち、"The Role of the Cowles Commission and RAND Corporation in Transforming Mathematical Economics in the Mid-twentieth Century." (『経済学史研究』第 61 巻第 1 号、pp.94-103、2019 年 7 月)という論文である。この論文では、特にコウルズ委員会とランド研究所という 2 つの組織に焦点を当てた。コウルズ委員会は、資産家のアルフレッド・コウルズがエコノメトリック・ソサエティを支援する一環として設立された数理経済学の研究所で、クーブマンズを始めとして、のちにノーベル経済学賞を受賞する経済学者を多数輩出した。同委員会は、第二次世界大戦中にヨーロッパから避難した数理経済学者に研究の場を与え、1940~50 年代に計量経済学、線形計画法、一般競争均衡の発展をもたらした。柔軟な研究資金と有能な研究者同士の活発な議論が新しい分野の確立につながる事が分かる。一方のランド研究所は空軍の科学研究機関であり、応用数学者が重要な役割を果たした。兵站や軍事戦略立案の手段として、線形計画法やゲーム理論が重要視された。社会科学においても軍事研究が、その後の民生研究につながる事が指摘できる。論文全体の結論としては、従来の経済学史研究では経済学者個人に焦点を当てられることが多いのとは対照的に、経済学者が所属した組織や集団を説明単位として用いる方法も可能であると提案した。

(3)「ロールズ政治哲学と政治・経済思想」研究会および「経済学は《良き社会》をいかに構想してきたか」研究会において、社会学者 M. Fourcade の著作 *Economists and Societies* について論じる報告を行った。本著作は、社会学者の観点から、20 世紀の経済学がどのような社会的役割を果たしたかが論じられ、経済学史の研究者の間でも重要な研究として評価されている。アメリカ、イギリス、フランスという3つの社会それぞれにおいて、経済学が異なった役割を果たしていること、特にアメリカにおいては、学問間の競争や民間財団の活発な科学支援といった背景が数理・計量経済学やシカゴ学派経済学の発展につながったことが説明され、経済学が現在の姿に至る上でアメリカ社会の特徴が大きな働きをしたことが論じられる。報告では、本書の書評などにも注目し、それぞれの学問領域でどのように受容されているかについても論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高見典和	4. 巻 88
2. 論文標題 書評 ロバート・スキデルスキー著 鍋島直樹訳『経済学のどこが問題なのか』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会経済史学	6. 最初と最後の頁 439-441
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takami Norikazu	4. 巻 61
2. 論文標題 The Role of the Cowles Commission and RAND Corporation in Transforming Mathematical Economics in the Mid-twentieth Century	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The History of Economic Thought	6. 最初と最後の頁 94 ~ 103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5362/jshet.61.1_94	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高見典和
2. 発表標題 M. Fourcade 's Economists and Societiesについて
3. 学会等名 「ロールズ政治哲学と政治・経済思想」研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高見典和
2. 発表標題 M. Fourcade 's Economists and Societiesについて
3. 学会等名 「経済学は《良き社会》をいかに構想してきたか」研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 野原 慎司、沖 公祐、高見 典和	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 320
3. 書名 経済学史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 経済理論史研究会	開催年 2019年～2019年
--------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------